



# 「蒙古襲来」の 痕跡を探る

～水中と陸上からのアプローチ～



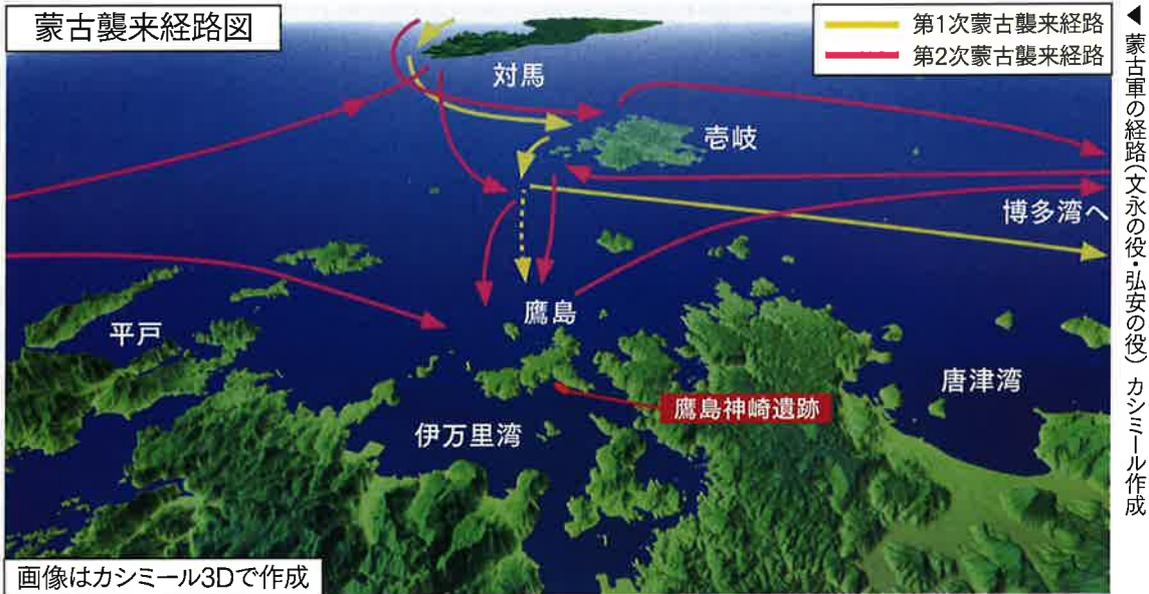
対馬市法清寺観音堂の本彫仏像群（県指定有形文化財）

# プロローグ

## 「蒙古襲来」の痕跡を探る

～水中と陸上からのアプローチ～

### 「蒙古襲来」と現代(いま)



「蒙古襲来」(いわゆる元寇)は、  
アジアからヨーロッパの一部まで版図を広げた  
モンゴル帝国が2度にわたって日本に侵攻した出来事です。

近年、これを題材とした漫画「アングルモア元寇合戦記」やビデオゲーム「Ghost of Tsushima(ゴースト・オブ・ツシマ)」が大人気となり、それらを通して対馬や壱岐が戦いの場であったことを知ったという方もいることでしょう。さらに、松浦市鷹島沖では、海底遺跡から元の沈没船が発見され、いかりの引き揚げが行われたことも記憶に新しいところです。

令和6年(2024)は、最初の侵攻である「文永の役」(1274)から750年となります。松浦・壱岐・対馬における蒙古襲来に関する最新の調査成果をお伝えします。

## 近代における「蒙古襲来」

「蒙古襲来」の舞台となった場所で物的な手がかりを探してみると、明治期から昭和の初めにかけて祀られた神社、銅像や石碑などの祈念碑、蒙古軍の侵攻から神風による敗退までを描いた絵画など、比較的新しい時代のもので多いことに気づきます。福岡市の「元寇防塁」そのものは往時のものですが、これら近代の記念物は当時の歴史考証にもとづくもの、という前提で接する必要があります。



▲平景隆の墓  
新城神社境内にあります

元寇防塁▶  
福岡市早良区の  
西南学院大学付近



▲小茂田浜神社鳥居(大正13年)  
一般的には対馬で元寇の舞台として最も知られています



- 明治10年(1877) 平景隆の墓・新城神社(壱岐市)
- 明治37年(1904) 銅造亀山上皇立像(福岡県指定有形文化財)・銅造日蓮上人立像(福岡市指定有形文化財)
- 明治42年(1909) 矢田一嘯「蒙古襲来絵図」(うきは市、福岡県指定文化財)
- 明治43年(1910) 東公園パノラマ・ジオラマ館(福岡市)
- 大正13年(1924) 小茂田浜神社鳥居新設(対馬市)
- 昭和 6年(1931) 元寇防塁(福岡市)国史跡指定
- 昭和19年(1944) 壱岐神社創建(壱岐市)

## 水中と陸上からのアプローチ

長い間、「蒙古襲来」に関する直接の物証としては、博多湾岸ののこる元寇防塁が知られているのみでしたが、昭和49年(1974)に松浦市鷹島の海岸で蒙古軍の「管軍総把印」がみつかり、昭和55年(1980)からは海底遺跡の調査が始まりました。近年は、元の沈没船がみつかるなど水中からのアプローチが本格化しています。

このほかにも、対馬には文献から蒙古軍が上陸したと考えられる佐須浦があり、壱岐にも県の史跡に指定されている「文永・弘安の役」の古戦場があります。これまで発掘調査が行われたことがなかったこれらの遺跡について、今回初めて考古学的な発掘調査を行いました。



▲海底での調査風景

さらに、壱岐には蒙古軍との関連も伝えられる海底から引き揚げられたたいかり石などがあります。調査を通して「蒙古襲来」と関わりのある仏像の存在も明らかになってきました。

水中と陸上から「蒙古襲来」の痕跡を探る新たなアプローチについて紹介していきます。

元のパスパ文字で  
刻字されています。  
下級将校クラスのもの  
管軍総把印▶



# 松浦

## 「弘安の役」と鷹島

「文永の役」の失敗から7年後の弘安4年(1281)、元のクビライは再度の日本への侵攻を企て、高麗から発した東路軍と中国南部を発した江南軍が7月に平戸、鷹島沖で合流しました。そこから博多湾を目指そうとしましたが暴風雨となり、多くの軍船が沈んだという記録があります。

鷹島では、昭和55年(1980)に初めて水中調査が実施され、その後40年以上にわたって継続的に調査が行われており、平成23年(2011)には、琉球大学(現:國學院大學)池田榮史教授を代表とする研究チームによる調査で、水深約23mの海底から元の軍船のものと考えられる船底(竜骨と外板)が発見され、「鷹島1号沈没船」と命名されました。翌年3月には、これまでの調査・研究の成果から鷹島海底遺跡の一部である神崎港沖約384,000㎡が、「鷹島神崎(こうざき)遺跡」として海底遺跡では初めて国の史跡指定を受けています。

▼ 鷹島の位置



▲ 海底での様子(いかり木材)



▲ 海底での様子(いかり石)

## 元の軍船の「いかり」を引き揚げる

令和4年(2022)10月1日、「弘安の役」から約740年ぶりに「一石型木製いかり」が海上に姿を現しました。いかり引き揚げに係る調査は、9月15日から10月5日にかけて実施しました。

鷹島の南岸海域は「鷹島海底遺跡」として、弘安の役(1281年)に元軍の船団が暴風雨で沈んだ場所として知られています。

引き揚げた「一石型木製いかり」は、碇石が一つで歯のついた木材で挟み込む構造となっており、鷹島海域では初めての出土例です。これまで鷹島では、36個の碇石が見つかっていますが、全て2つの石を組み合わせる分離型でした。

発掘調査の財源には、国県の補助金だけでなく、ガバメントクラウドファンディング(GCF)で募った資金を活用しています。令和2年(2020)11月20日から翌年2月17日まで「海底に眠る歴史!元寇のタイムカプセル引き揚げプロジェクト~過去を現代に!そして未来へ残せ!~」と題し寄付を募りました。目標金額1,000万円に対し、全国229名の方々から目標を上回る1,152万3千円の寄付が集まりました。特典の1つとしていた「木製いかり引き揚げ見学ツアー」には全

国から59名の応募があり、うち34名が、引き揚げの瞬間に立ち会いました。参考までに、見学ツアー参加に係る費用(船代、当地までの旅費、滞在費)は全て自己負担でした。

今回の調査は、港湾工事等に伴う緊急発掘調査では難しかった作業工程や必要な機材の調整、近隣養殖漁場への対策、引き揚げ後の保存処理工程や設備の準備など引き揚げのプロセスを事前に計画し実施しています。



▲ いかり引き揚げの様子

台風による中断はあったものの、事故もなく無事完了することができました。しかし、まだまだ作業は続きます。「いかり」の木材部分は、海底に約740年埋まっていたために、木材組織が劣化した状態になっ



▲ 引き揚げたいかり



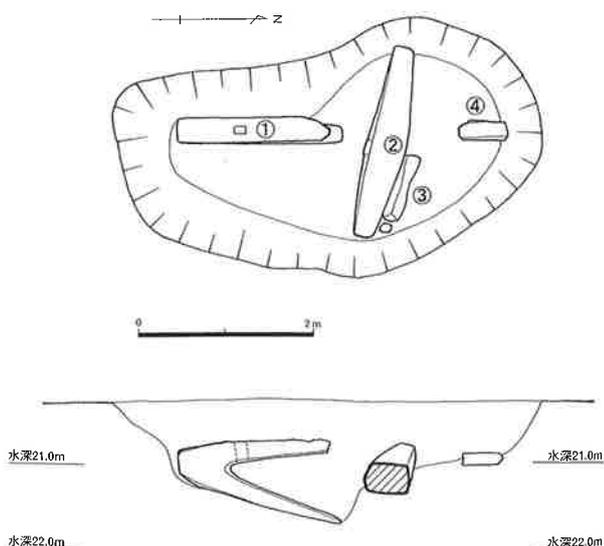
▲ いかり石引き揚げの様子

ています。そのまま自然乾燥させると、収縮・変形してしまうため、形を維持するための保存処理が必要です。松浦市では、これまでの研究の成果を基に約3年の歳月をかけてトレハロース(糖類の一種)含浸法を用いて処理を行います。脱塩処理した上で、専用の処理槽で加温しながらトレハロース水溶液の濃度を少しずつ上げ、木材に浸透させていきます。十分に含浸が出来た後に乾燥させ、表面の余分なトレハロースを除去し、展示することとしています。処理の様子は、松浦市立埋蔵文化財センターで見学することができます。



▲ GCF見学ツアーの様子

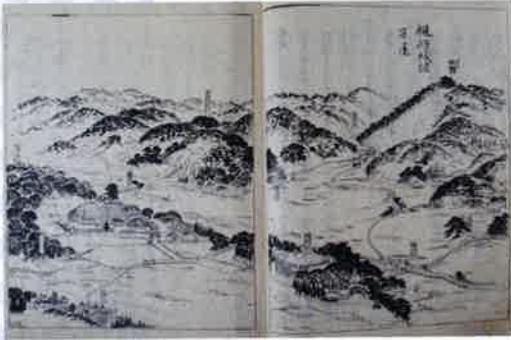
## 引き揚げられた「一石型木製いかり」



▲ いかり実測図

- 今回引き揚げたのは「一石型木製いかり」。鷹島1号沈没船から北西に約100mの位置にありました。
- 「一石型木製いかり」は、平成25(2013)年に水深約20mの海底で確認されました。
- いかりの木材部分(レの字の部分)は幅25cm、長さ175cm、重量157.5kgです。(図①)
- 碇石は、長さ230cm、中央部分が最も広く約50cm、厚さ35cm、先端部分の幅約20cm、厚さ約15cmです(図②)。
- 碇石の北側にあった幅・厚さ15cm、長さ80cmの石材も引き揚げを行いました(図③)。
- 碇石を挟んで、いかりの木材の延長上に幅約20cm、厚さ約15cm、長さ約50cmの角材が検出されており、今回引き揚げを行いました(図④)。

# 壱岐



『壱岐名勝図誌』より「樋詰城墟」▲  
右下に「城墟」(樋詰城)が描かれています

## 壱岐における「文永の役」の記憶

「文永の役」における壱岐侵攻について、当時の古文書(八幡愚童訓)には、「島の西側に蒙古の船が着き四百人ほどが上陸、守護代平景隆が家人百人と『庄の三郎が城』で応戦したものの敗れて自害」とあります。これ以上に

詳しい文献はなく、戦いにちなんだ場所や地名の多くは伝承として受け継がれました。江戸時代の古文書(壱岐國續風土記)では、

『『庄の三郎が城』は勝本町新城のひのつめじょう樋詰城である』としています。これを根拠として明治期に平景隆の墓と新城神社が祀られたのです。



▲ 絵葉書「平景隆一門自刃スルノ図」  
原画：矢田一嘯  
明治末から大正頃、福岡市東公園にあった元寇パノラマ館発行の絵葉書



▲ 新城神社古写真(絵葉書)  
右端の鳥居は大正6年(1917)奉献なので大正から昭和初期の写真です

## 県指定史跡「文永の役新城古戦場」とは

壱岐市勝本町の新城東触には「千人塚」があり、「文永の役」の歴史的意義を後世に永く伝える顕彰地として昭和50年(1975)に県の史跡に指定されています。指定の委員であった小島小五郎(国立歴史民俗博物館)は、当時の文献(八幡愚童訓)に記された平景隆が自刃したとする「庄ノ三郎が城」の場所は、現在の新城神社(樋詰城)であるとは確定できないうしつつ、伝承や地形などから付近一帯が激戦の地であったことは疑いないとし、千人塚の指定について了承しています。当時の指定は、文献・伝承・地形などを根拠として行われ、発掘調査は行われていませんでした。



▲ 千人塚 史跡の範囲は塚と記念碑の周りのみです



▲ 発掘風景  
後に見える建物は新城神社です

## 初の発掘調査～新城神社と唐人原～

「文永の役」の痕跡を発掘調査から探るために選んだのは、明治期に平景隆の墓が祀られ、新城神社が創建された樋詰城と、地名から蒙古との関係がうかがわれる唐人原です。樋詰城では、拝殿や



▲ 関連位置図

本殿の周辺で発掘を行いました。戦いの痕跡を裏付ける遺構や遺物はみつきませんでした。また唐人原も水田に突き出た低い台地の斜面で発掘を行いました。同様な成果でした。今回の結果だけで、すべてを判断することはできませんが、乏しい文献史料や伝承にもとづいた近代における場所の推定に一石を投じるものと言えるでしょう。



## 平景隆と長徳寺の阿弥陀如来像 ～「文永の役」に遭遇した仏像～

芦辺町長徳寺の「木造阿弥陀如来立像」は平安時代末期の作で、長崎県指定有形文化財に指定されています。郷土史家の山口麻太郎は、長徳寺の前身である見性寺は、瀬戸浦の船匠城を居城とした守護代平景隆の持仏堂であったと推測しています。この仏像が平景隆の持仏として「文永の役」に遭遇したとすれば、「蒙古襲来」に関わる間接的な物証として見直すことができるかもしれません。

◀ 阿弥陀如来立像 壱岐には珍しい平安時代に造られた仏像です

## 芦辺港周辺のいかり石

壱岐東岸の芦辺港の周辺では、帆船時代のいかり石が複数みつっています。海底から引き揚げられたものですが、現在は供養塔や墓標、ご神体などに転用されているもののほか、壱岐神社には「元寇いかり石」と伝えられるものがあります。実際に元の軍船に使われていたものかどうか判明していませんが、複数のいかり石が遺されていることは、芦辺浦が古くから海上交通の要衝であったことを示しています。弘安4年(1281)の「弘安の役」の際には、肥前の御家人龍造寺氏(りゅうぞうじ)が瀬戸浦で蒙古軍と戦った記録があり、付近に蒙古軍が襲来していたことは確かなようです。



▲ いかり石の分布



## 発掘調査の成果～下原と樫根～



▲ 出土遺物  
中世前期(11～13世紀頃)の土器や陶磁器で、  
産地は日本・中国・韓国です

発掘調査は、これらを踏まえて佐須川を挟んだ下原と樫根から適地を選びました。下原は、若御子神社の側と龍泉寺前付近の2箇所、樫根は、公民館の前とやや西側の2箇所を調査することにしました。その結果、下原の龍泉寺前から、鎌倉時代の中国産や国産の土器、陶磁器のほか、焼土(火を受けて

焼けた土)がみつかりました。これらが「文永の役」と直接結びつかどうかについては慎重な検討が必要ですが、蒙古軍の侵攻が推定される場所で、同時期の物証が発見された意義は大きく、今後のさらなる解明が期待されます。

焼土(中央の赤い土) ▶



## 「佐須」の歴史を見直す～法清寺観音堂の木彫仏像群～



▲ 調査風景(下原)  
写真の右側が龍泉寺方向です

蒙古軍が上陸した佐須は、弘仁4年(813)にも刀伊(女真<sup>とい</sup>族)の賊が来襲しており、古くから銀山(鶴野<sup>つるの</sup>)を有する重要な浦であったためと考えられます。佐須・樫根の法清寺観音堂には、16体の木彫仏像が伝わっています。これらは、江戸時代以前、鶴野の観音堂にあったもので、かつては「蒙古仏<sup>もくちよう</sup>」と呼ばれ蒙古が攻めてきたときに海岸に漂着したものと伝え

られていました。これらは昭和48年(1973)と昭和63年(1988)に長崎県の有形文化財に指定されましたが、その際に行われた調査で、平安時代中期から末期の国内産であることが判明しました。鶴野銀山の繁栄とともに造られ、「蒙古襲来」にも遭遇したものと考えられます。

かつて仏像が伝わった鶴野と今回発掘成果があった下原龍泉寺前、宗資国の塚や銀山跡なども含めて一体的な視点で「佐須」を見直すことで、豊かな歴史を体感できることでしょう。



▲ 法清寺観音堂  
明治21年(1888)に下原村鶴野の観音堂より木彫仏像群が移されました



▲ 木彫仏像群  
かつては22体の存在が確認できましたが、現在は16体が伝わっています

## 歴史的出来事と「聖地巡礼」

松浦・壱岐・対馬における「蒙古襲来」の痕跡について最新の調査研究の成果を紹介してきました。水中に加えて陸上でも蒙古軍の攻撃による可能性を示す痕跡を発見することができました。こうした水陸の痕跡は、海から侵攻してきた蒙古軍の動きを直接示す物証であり、一体的に捉えていくことでその全貌が明らかになるものと期待されます。また、これらの痕跡は、小説・漫画・ゲームなどのストーリーにおける創造の真の源でもあり、歴史的出来事を直接物語る現場(いわゆる「聖地」)であるとも言えます。これらを巡る新しい旅に出かけてみましょう。

現地を訪ねると共に、  
以下の関連施設でも様々な歴史を体感できます。  
ぜひ足をお運びください。



### 松浦市立埋蔵文化財センター

長崎県松浦市鷹島町神崎免146  
開館時間／午前9時～午後5時

TEL 0955-48-2098



### 壱岐市立一支国博物館

長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515-1

開館時間／午前8時45分～午後5時30分(最終入館は午後5時まで)

休館日／毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日休館)

※GWおよび夏休み期間中は無休 ※12月29日～31日休館

TEL 0920-45-2731



### 対馬博物館

長崎県対馬市厳原町今屋敷668-2

開館時間／午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日／毎週木曜日・年末年始

(木曜日が祝日・振替休日の場合はその後の最初の平日)

年末年始休館期間は12月28日～1月3日

※休館日は変更することもあります

TEL 0920-53-5100





鷹島海底遺跡引き揚げ遺物(長崎県埋蔵文化財センター)

### 主な引用・参考文献

- ◆ 相田二郎1958『蒙古襲来の研究』吉川弘文館
- ◆ 川添昭二監修1981『海から蘇る元寇』朝日新聞社
- ◆ 九州国立博物館・対馬市2017『対馬 - 遺宝にみる交流の足跡 - 』
- ◆ たかぎ七彦2015『アンゴルモア元寇合戦記』① KADOKAWA
- ◆ 長崎県教育委員会2018  
長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第25集『鷹島海底遺跡』
- ◆ 永留久恵1965『対馬の古跡』対馬郷土研究会
- ◆ 永留久恵2009『対馬国志 中世・近世編』[対馬国志]刊行委員会
- ◆ 服部英雄2017『蒙古襲来と神風 中世の対外戦争の真実』中公新書
- ◆ 山口麻太郎1982『舌岐國史』長崎県舌岐郡町村会

本パンフレットは、  
下記のHPよりダウンロードすることができます

長崎県教育庁学芸文化課

<https://www.pref.nagasaki.jp/section/edu-gakubun/>



編集執筆：長崎県学芸文化課(川口洋平)、松浦市文化財課(内野義)、対馬市文化財課(監修)、彦岐市文化財課(監修)  
デザイン：久保田由佳(長崎県埋蔵文化財センター)  
竹下加奈子(株式会社ピーエス・クリエイティブ)  
印刷：(有)東洋印刷所  
発行：令和5年11月 長崎県・松浦市・対馬市・彦岐市